

<講座2>「ろう重複者の社会参加の現状」

*パネラー	たましろの郷 生活支援部	支援員 山口 翔馬
	社会福祉法人ななえの里 就労継続支援 B 型	ともしび工房
		所長 八橋 宏
	東京ろう重複者とあゆむ会	大石 純子
	たましろの郷の利用者	大池 昭雄
		浅野 かほる

花田：昨日は障害児学校に通う親御さんから、ろう学校に入るのがよいのか特別支援学校に入るのがよいのかという話が出された。卒業後のなかまたちはどのような道を選んでいるのか。作業所での状況はどうか。ろう者だけの施設、あるいは他の障害者と一緒に働いている施設。家族、関係者の方においていただいている。まず自己紹介をお願いします。

山口：たましろの郷の生活支援員山口翔馬です。たましろの郷で働き始めて9年経つ。

八橋：私は東京都国分寺市就労継続支援 B 型ともしび工房の所長で八橋宏と申します。私たちの施設は、もともとは身体障害の方の通所授産施設として平成3年に開所し、平成22年にB型に移行して活動している。主にパンとか菓子の製造や販売、リサイクルの物品販売、印刷の仕事。今現在は20代の女性のろう重複の方1名を受け入れており、どのような経過で今日までいらっしゃるのかをご紹介させていただきたい。

大石：足立区に住んでおります大石純子と申します。私の子供は現在30歳。聴覚障害が見つかったのは生後6か月頃。就学前教育、幼稚部、小学部、中学部、高等部を卒業して現在は地域の作業所に通っている。12年目になる。

花田：国分寺のななえの里の話があった。たましろも国分寺で市役所の清掃の仕事を分け合っている。身内のような団体である。

まずたましろの郷はどのような施設か説明してほしい。

山口：施設入所者31名、男性16名、女性15名で毎日あわただしい夜を過ごしている。生活介護は47名。平均障害程度区分は4.7。平均年齢43.7才で比較的若いほうの施設なのではないかと思う。作業グループは大きく分けて3つ。就労自立支援班、これは国分寺で清掃作業中心。立川ろう学校のすべてのトイレ、国分寺市役所、地域センター清掃、公園清掃も行っている。

たましろで作業しているのは2つ。一つは生活就労支援。比較的元気に働くことのできる人。施設内の清掃、今は球根発送などを行っている。たましろの中の清掃は8人。いろいろな個性を持ったなかまが多い。やっている内容も創作活動。ヘアゴムを作ったり、編み物、さおり織、なかまの特性や好きなことに合わせたことをやっている。後援会新聞、たましろの1300~1400人ぐらいの方への発送業務。これは

得意ななかまが多い。創作活動など新しい取り組みを入れた中で今まで作業に行きたくなかったなかまも 1 ヶ月 15 日ぐらい休んでいた人が皆勤賞になった。すごく良い効果が出ている。このグループから清掃作業をめざしたりできるといいなと思っている。

47 名のなかまの言葉は 47 か国語と自分の中では思っている。食べているお皿を投げる、これは言葉ではないととらえる方が多いと思う。これは「ごはんがまずい」という意味かもしれない。

またたくさんボランティアに支えられている。年間のべ 1000 人ぐらいの人に支えられている。施設の中の行事もたくさんやっている。

花田：次に他の障害者と一緒に行う人も働いているという現状報告をお願いしたい。

八橋：ななえの里は平成 3 年に通所授産施設として開所。中途の障害、肢体不自由の方、年齢の高い方が多い施設だった。私は平成 8 年に現場の職員となり、事務職などを経て平成 19 年から所長を拝命しました。色々な年齢の方や障害の状況もさまざま方が利用されるようになった。この 10 年位の間に、利用者が若い方、知的障害の中程度の方や精神の方も入られたので、利用者の方のニーズも、自分のペースでいたい人や「忙しくても頑張ってくださいたくさん工賃が欲しい」というようにニーズも分かれてきた時期。就労継続 B 型にいつ移行しようかというタイミングだった。その時はパンをやっているところはなかったの、パンを作るとなるとお仕事優先。売りに行ったりすることも必要になった。平成 21 年度から始めたのだが、1 年間試行錯誤して何とかやっていけそうなので平成 22 年から B 型に移行した。

定員は 20 名で在籍は 30 名。15 名がパン、お菓子作りをしている。その中に一人ろう重複の女性の方がいらっしゃる。この方は立川ろう学校高等部在学中から実習に来ていた。ほかの方とやって行けるかどうか実習中から戸惑いはあったが、ご本人は一生懸命だった。手話のできる職員はいなかったが、筆談など独自のコミュニケーションの取り方で大抵のことは何とかなってきた。平成 24 年から入ってもう 7 年目になる。レジのできる人は何人かの交代制だが、たまたま担当が休んでしまった時に、彼女は聞こえないけれども計算もできるし、ということで半日職員が近くにいる形でレジをやってもらった。問題なくできた。「聞こえないので指で示してください」というボードを作成しました。お客さんもそのボードを示せば「わかった」ということで慣れてきた。常連の方は、聞こえないけれども一生懸命頑張っているという独自の形でのコミュニケーションできてきた。聞こえない人は他の利用者の中では「楽しい雰囲気だな」とわかるとニコニコしているけれども、「もっといっぱい話したい」というストレスを抱えているのかなと思う。やりたいこと、できることを目指して進んで行ってほしいなと思う。

花田：なかま同士のコミュニケーションの中でストレスがたまっているのかなと心配してくれる職員がいることはありがたい。たましろとして良い参考になった。

大石：一番近いところに希望して働きに行くことができた。「山鳥作業所」に行かせてもらって、中学の頃、あまり熱心にやっていたせいか、風呂場でパニックになり夏休みの終わりに大けが救急車。先生からは「お母さんが熱心にやりすぎた」と言われた。でも親として信念は貫きたい。「仕事をする所はこういうところ」というのを教えられた。職場では仕事をしないとされていたが、「今は周りを見て勉強しているのだ」と職員に言ってもらったことがよかった嬉しかった。安心したがその人が移ってしまった時は自傷行為が出た。細かい仕事が好きで得意。でも嫌いな仕事はしない。そこで職員さんが「これ(好きな仕事)が終わったらこの仕事(嫌いな仕事)をしましょう」というようにやってくれている。体を動かすのが好き。搬入搬出の仕事をお願いした。たましろの短期入所を使うようになったのは、これから先のことを考えたときに、同じ聞こえない人と一緒に旅行に行くことは息子が一番の苦手だったから。

小学校から学童は結構連れていった。「学校にいるよりも楽しいみたいです」と先生に言われた。同じなかまと一緒にいるのは楽しいのだと。私の精神状態を維持できる。親もそういう状態にいなければ。あゆむ会の親と接するようになって、子供のことを一生懸命やっている。私もそうできたらいいなと思った。

先輩のやっていることに同感して仕事に行くことを嫌がらず、仕事が楽しいのは親にとって嬉しいこと。避難訓練の説明でも火災と地震は違うということがわからなかった。職場でも12年になり体で覚えてきた。聞こえないなかまと会うと嬉しそうに走っていく。同じ障害のなかまと一緒なのはこんなに良いことなのだと思う。

花田：「地域でともに働く時代だ」と国は言う。「施設入所は終わり、地域で働く」ということには基本的には賛成だ。施設が無い社会は理想。コミュニケーションは手話。3名のお話をうかがうと手話があるかないか、聞こえないなかまがいるかないかで判断するという不安はある。では手話があればすべて問題は解決するのか。たましろは50人の職員。採用の時に聞こえない人は当然手話ができる。募集要項に手話ができることは明記していない。運転免許だけが必須条件。手話を知らないで入る職員がどうなっているのか？

山口：なかまとコミュニケーションを取ることが仕事の大きな一つ。メインというか、目の前のなかまとのコミュニケーションが取れないと全く意味がない。当事者が何をしたいのかを考えてもらうためにコミュニケーションが必要。仕事をする上では手話を覚えたり、なかまの特徴を覚えていくことは必要。1ヶ月で覚えてしまう人も、何年もかかってがんばって覚える人も。最近では絵カード。これを使ってなかまと職員のコミュニケーションを図ったりしている。

花田：聞こえない人には何をすべきかを考えるのが受け入れ側の責務。手話だけがすべてではない、職員50人いれば50通り。こちらが手話のうまい先生を求めるというのではなく、受け入れる教師が手話を見につけることは義務。施設も職員がどのようなあり方をするのが必要かを考えてもらう。80%は手話を知らない。困るのは職員。コ

コミュニケーションという言葉はイコール手話ではない。生活環境全般を含めたうえでなければコミュニケーションとは言えない。働く環境を整えることを考えてほしい。

八橋：聞こえる聞こえないではなく、いろいろな原因で辞められる方もある。人間関係でストレス抱えて辞める人もいる。元には戻せないが、何が至らなかったんだろうと考えて明日からの支援に生かすことは大事。

花田：たましろの場合、辞めた人の理由は？

山口：辞めたなかまの話。環境が合わなかったのかという人。手話の施設だからもっと会話できると思っていたとか。知的のレベルによって出す表現が違うのでジレンマがあって辞めた人もいる。

花田：では、二人のなかまと話しながら聞こえない集団の中でどのように変わったかを理解していただきたい。

基本は地域でともに暮らす。それを尊重しながらたましろのあるべき姿を考える。

山口：こういうところへ行きたい、こういう仕事したい、楽しかったこと、食べたことの説明はできても将来どういう仕事をしたいということは語れない。耳の聞こえない人の支援は代わりの耳になればいい。耳が聞こえなくて手足が動く方にいろいろと支援することはない。過剰になる。自分の思いを言えないなかま。気持ちを引っ張りだすことを工夫。なかまの意思を引き出すことは知的も精神も同じ。その人の環境、家族構成、既往歴などから本人の声を引っ張りだす。それを大切にすることがたましろらしさ。そこに力を入れていきたい。なかまの声を引き出すことに時間を作りたい。

花田：地域の作業所でどういう進行を考えているか。

八橋：もとは身体障害者の方の施設。2/3は知的精神、弱視の方も。地域でできるだけ仕事の機会をたくさん提供して1円でも工賃を多く払いたい。利用者の方と協調していければ。職員に対しては支援させていただいてそこから学ぶという姿勢で仕事をしたい。どんなに能力があっても最終的には対人間の支援、お付き合い。バックボーンとして家庭環境や本人の性格あり。一人一人に対する向き合い方は違う。

いろいろな障害の方を受けいれていきたい。我々には見せない姿を家族に見せていることも今日聞けたので、帰ってくる場所として同じ障害の悩みを抱えた人のグループホームが地域に根差していけばいいのかなと思う。たましろがお考えになっているような事業かもしれない。

花田：施設の場合、「うちの子は聞こえるが知的障害が重い。施設利用できるか？」と問い合わせがある。「ろう者だけが対象」とは言っていない。どなたでも受けるのは基本。1名が知的、全く見えない方もいる。精神障害の人も、てんかんの人もいる。たましろはあらゆる障害を受ける。これからは様々な障害者とともに働ける場所が必要。

大石：グループホームなど入って安心出来る場所が必要。今の作業所が一番合っているの

でそこに通いつつ、生活できるグループホームがあってほしい。今まですべて親と一緒にやってきた。親は何でも子どものことをわかっているのをつい口を出してしまう。年齢相応のことができていない。自立できないといけないな。

花田：今話された中で、私たち施設職員として考える必要がある問題というのは、親だからわが子のことが一番よくわかっている。親子の関係は第三者ではわからない。絶対に必要。でもそれだけでいいのか？親子二人だけの生活で一生過ごすは無理。社会に参加するときの役割は職員。役割を明確に表さないとうちの子の子とわかっているのかとなってしまう。

職員に言うのは「親が絶対手を出せない問題はなかまの集団支援をするところ」。それぞれの役割がある。

では何か質問があればどうぞ。

花田：昨日参加者から「作業所では利用者という言葉を使っている、なぜなかまというのか？なかまと利用者は意味が違うのか？」と質問された。職員の立場からどうか？

山口：利用者、お客様という表現もあるが、自分としては同じ職場のなかま。仕事、清掃作業、ワックスをかけるなかま。同じ清掃の目的のなかま。なかまを使うと質問されるので利用者ということもある。だが基本的にはなかま。手話とかコミュニケーションはここにいる二人のなかまからも多くのことを学ばせてもらった。「なかま」と言い続けていきたい。

花田：本人の許可を取っていますが、彼女は88歳？でも正しい生年月日は分からない。名前も戸籍上の名前は分からない。戦災孤児として保護された。保護された時は10歳位だったらしい。(保護された)施設では清掃の仕事でしたが高齢になったのでたましろうに入所した。たましろうに入所されてから手話を覚えた。入所して自分の要望を出せるようになった。

浅野：仕事が好き。頑張っている。

花田：彼は20歳位まで家族と離れて保護された。完全に精神障害者として長い間精神病院に入っていた。そして聞こえないだけで精神病ではないことがわかり、訓練を1年受けた。施設に入る前は意思疎通ができず暴れて警察に捕まったこともあったようだ。たましろうに警察から連絡が入って、受け入れたのが10年前。なかまとのコミュニケーションは手話で今はできるようになった。普段は本当に面倒見の良い人。壇上の二人は聞こえない集団の中に入ってから非常に成長された方。集団の中に入って手話があるなかまの中に入って変わっていったお二人である。

花田：たくさんのなかまを呼んでお話をしてもらいたかったが、今日は代表として2名の方をお願いした。なぜろう重複独自の作業所を作るのか課題として皆さんと一緒に考えていきたい。それぞれの課題を出し合って来年の課題としたい。

花田：最後に感想を一言ずつお願いできれば。

山口：今日はありがとうございます。本当に打ち合せも原稿もなかったが、良い時間を過ご

させていただいた。

八橋：花田さんもおっしゃっていたようにいろいろな障害がある方が地域でどう生活していくのがいいのかは、日々考えてきたつもりだったが、意識して考えていこうと思った。

大石：障害の子どものために、施設の人も周りの人もたくさんの方が応援してくれ、援助してくれているから大きくなって来れたんだなと感じた。親亡き後も公のお世話になって生きていくなら親として教えておきたいことや兄弟に伝えておかなくてはならないこともあると思った。

花田：事前打ち合わせはあえてしなかった。準備の時間を与えてしまうと話が固くなってしまふ。あえて詳細もお伝えしなかった。皆さんありがとうございました。